

事後評価報告書に含める事項

1. 基本情報

- (1) 実行団体名: 特定非営利活動法人宇和島 NPO センター
- (2) 実行団体事業名: 平成 30 年 7 月豪雨災害からの復興に向けた被災者再建と地域食堂が連携した居場所づくり支援プロジェクト
- (3) 資金分配団体名: 一般社団法人 RCF
- (4) 資金分配団体事業名: 複数被災地における復興支援モデル構築事業
- (5) 事業の種類: 災害支援事業
- (6) 実施期間: 2021 年 6 月～2023 年 3 月
- (7) 事業対象地域: 愛媛県宇和島市旧市内、吉田町、三間町

2. 事業概要

この項目では、対象事業の概要を記載してください。この項目では、記載にあたっては以下の内容が明確になるように記載してください。

- ①事業によって解決を目指す社会課題と想定される直接対象グループ
宇和島市旧市内・吉田町・三間町における被災者
- ②事業の概要(中長期アウトカム・短期アウトカム・活動)
中期: 被災を受けた方が新しい生活環境・コミュニティにて、不安なく生活出来ている状態
宇和島市の各地域で、地域住民同士が支え合う、共助ができるコミュニティが形成されている状態
今後、災害が発生した際にも、本拠点を中心とし、人と人をつなぎ、支えられる防災の観点、高齢者の見守りの観点も持った拠点となっている状態
地域課題の解決をボランティア等で補うことで関係人口の維持・拡大の一助を担っている状態
短期: 「宇和島市旧市内・吉田町・三間町」3拠点において、被災者(みなし仮設の住民など)と地域住民、地域外の人たちの交流が促進されコミュニティ形成された地域となる
活動: 3 拠点でイベントを実施する。イベント等を通じて参加者の声を聞き、問題や課題がある場合は行政など解決策に結び付け、解決する
各地域のニーズや特色に合わせたイベントパッケージのプランを策定する
他団体にも声をかけ、連携イベントの計画を立て、実施する
作業系・サロン系に分けてボランティアを募集し、登録していただく
各地域の課題やニーズを集め、拠点で開催する催し(清掃活動・地域食堂・傾聴)へボランティアに参加していただき交流を促す
- ③出口戦略
 - ・宇和島 NPO センターの HP・Facebook 等 SNS で常に活動状況を発信
 - ・月末に活動報告書(Carriage 新聞)を作成し、月初に配布・発信。活動報告書(Carriage 新聞)で当月開催される催しが楽しみになっている状態を期待する。
 - ・宇和島 CATV や愛媛新聞には常に活動状況を共有し、発信してもらう
 - ・宇和島市子ども食堂連絡協議会と情報共有をし、一緒に開催できるパッケージプランを提案する
 - ・社会福祉協議会と連携し、みなし仮設住宅の方や住居を構えた方等のフォローをする
 - ・防災士会や地区防災と連携し、防災について弱い地域はないか対話する
 - ・JA や VOCE とボランティアニーズについて情報共有を行う

3. 事後評価実施概要

- (1) 実施概要
 - 1 どんな変化をこの事業の重要なポイントとして設定し評価を実施したのか
作成した支援パッケージが各居場所でどのような効果があり、住む人がどのような感情の変化があったか。また、支援パッケージが継続して実施できるような仕組みとなっているか。
 - 2 どんな調査で測定したのか※調査概要の記載の仕方は末ページ記載例参照
アンケート調査(主な項目は: お困りごと調査、あったらいいなと思うこと、もの。

次の災害時に向けての対策等)

3 調査結果をどのように深掘りし価値判断をしたのか

住民が地域課題を一緒に考えるようになり、一緒に活動することでお互いを見守ることができるようになってきた。また、変化してきた人に役割を与えたり、または、自ら勝手にみまもり活動ができるようになってきていた。

(2) 実施体制(内部/外部、評価担当役割、氏名、団体・役職)

内部:本部事業統括・谷本友子、U.grandma Japan、非常任理事

:本部事業担当・山本和美、吉田町手をつなぐ育成会、非常任理事

:本部会計担当・薬師神理子、宇和島市 NPO 団体 If、非常任理事

:コミュニティ支援(居場所づくり)・吉川優子、大好き宇和島、非常任理事

:コミュニティ支援(居場所づくり)・林 昭子、特定非営利活動法人宇和島 NPO センター、常勤職員

:コミュニティ支援(居場所づくり)・宮土良太、イベントプランナー、非常勤

:ボランティア受入・吉川優子、大好き宇和島、非常任理事

:ボランティア受入・山口勇喜、特定非営利活動法人宇和島 NPO センター、常勤職員

:ボランティア受入・岡田雅信、Mask Bound、非常勤

4. 事業の実績

4-1 インプット(主要なものを記載)

(1) 人材(主に活動していたメンバーの人数や役割など)

内部(本部事業部:7名・会計:1名)/外部(外部監査:1名)

(2) 資機材(主要なもの)

タブレット1台

空気清浄機1台(按分)

インカム6器

テント1張り(重り4脚分)

荷台車

パネルパーテーション5枚

検温器手指消毒付きスタンド式

パソコン1台(按分)

(3) 経費実績 助成金の合計(円)

1 契約当初の計画金額 14,445,000 円

2 実際に投入した金額 13,727,731 円

(4) 自己資金(円)

1 契約当初の自己資金の計画金額 1,200,000 円

2 実際に投入した自己資金の金額と種類

R3 300,000 円 R4 235,000 円 愛媛県 NPO 法人育成支援事業

R3 100,000 円 R4 82,000 円 宇和島市地域づくり事業

R3 100,000 円 R4 52,500 円 共同募金事業

R3 300,000 円 伊予銀行「エバーグリーン」

R3 30,000 円 R4 20,000 円 サロン活動費用

R3 4,480,800 円 R4 4,944,000 円 宇和島市委託事業 被災者支援・NPO 等連携推進業務

R3 2,335,000 円 R4 165,000 円 災害ボランティア中間支援プログラム

R4 504,091 円 孤独・孤立対策かん民連携プラットフォーム

R4 1,000,000 円 体験型防災プログラム事業(宇和島市)

(5) 資金調達で工夫した点

満額で請求しないよう、必要最小限の金額で申請。また、資金分配企業様にご理解

いただきやすいような文章且つ簡略化し、申請した。

4-2 活動とアウトプットの実績

(1) 主な活動

◆旧宇和島大浦地区:もてころ食堂を開催している大浦自治会館を拠点として事業を実施。

地域の課題:次の大規模災害(南海トラフ地震)へ備え

大浦地区では、平成30年7月豪雨災害を経験した中、次の災害「南海トラフ地震」で甚大な被害が想定されており、地域の防災活動も積極的であることから、「防災活動」をテーマに地域食堂のもてころ食堂を中心に支援パッケージを実施した。

支援パッケージは防災カードゲーム等を中心に実施することで、住吉校区の住民約4300人で約700人集めることができた。

傾聴ブースを設置するも人は来ないことに気づき、カフェコーナーを設置。少しずつではあるが、地域の相談を受け付けることができた。

カフェコーナーは回を増すごとに同じメンバーが揃ってカフェコーナーを利用し、そのあとお弁当を購入する方が増えてきた。人も増え、話やすくなり、地域の方々で呼び合って、会話を楽しむようになり、交流の場となった。

聞き取り内容は、当初は平成30年7月豪雨災害時の不安や恐怖心等の体験を話される方が多く、支援パッケージの遊び(名前を入れる)を取り入れて、参加者同士で実施することやカフェコーナーで傾聴することで不安を和らげることができた。

利用者が増えてくると聞き取り内容は、防災活動や防犯対策、スマホの使い方、買い物する場所がないといった生活の相談が増えてきた。

スマホの使い方は、支援パッケージのスマホ講座を実施した。

防災活動については、市危機管理課と連携し、体験型の防災啓発活動を実施した。

買い物支援は、地域で活動している若手の農家団体(ミマメンバーマーズ)に依頼し、支援を実施した。

毎月開催される地域食堂(もてころ食堂)と防災支援パッケージとカフェコーナーを同時に実施することで、平成30年7月豪雨災害からの不安や心配を地域内で共有する場ができ、さらには次の災害への備えのために地域内でのつながりができ始めている。

地域食堂はすでに消防団、青年団、中学校保護者、また各それぞれの関係者友人で約20人名、また中学生ボランティアで自走されており、カフェコーナーについても地域内の民生委員で実施する動きとなっている。もてころ食堂を立ち上げたのは、元々別の子ども食堂が助けてを言えな人たちの声を聞き日頃から繋がっておくために立ち上がっていたが、コロナ禍でもあり難しくなり元々の子ども食堂は閉鎖することになったが、代表を変え継続するためにまた、立ち上げに地域の方々が協力するということでもてころ食堂として、継続していく形になった。最初は協力的でなかった方も次第に、協力し自分で動いていくようになった。住民への声掛けなどを自ら行っていかれる姿が見れるようになった。

支援パッケージは、コロナ禍の影響でこれまで屋外で開催しスペース的に駐車と配布、カフェコーナーでいっぱいになり地域内の会館で実施することはまだ難しいが、支援パッケージ自体は今後、連携するボランティア団体やボランティアの協力で対応するため、集客や地域の課題解決等に利用していく。

◆旧吉田地区:いぬび食堂とキッチンカーを利用した地域サロンを開催している吉田公民館とその周辺施設にて事業を実施。

地域の課題:平成30年7月豪雨災害からの不安

旧吉田地区は平成 30 年 7 月豪雨災害にてほとんどの世帯が被害を受けており、災害後の生活の不安や精神的不安があることを多く話しており、不安解消のために「安心」をテーマに地域食堂のいぬび食堂とその近隣で開催される地域サロン等と連携して、支援パッケージを実施した。
パッケージプラン



A. 防災

①防災ゲーム

「なまの学校」防災ゲームセット、など災害予備にたいして楽しく学べるゲーム。保護者同伴であれば幼稚園で実施することも可能です。

●申込人数：2人～
●実施時間：10分～
●対象者：幼児～小学生
●実施可能日：いつでも

こんな場面にオススメ

・子どもたちの防災教育
・楽しく学びたい

●申込人数：5人～
●実施時間：10分～
●対象者：幼児～小学生
●実施可能日：いつでも

こんな場面にオススメ

・子どもたちの防災教育
・楽しく学びたい

②パズル作り

パズルコードを編んで必要な時にすぐにはいて使えるアイテム。災害時は避難場所になったり、防災グッズに活用したり、使い方は様々。思いどおしくして活用したいのも特徴。

●申込人数：5人～
●実施時間：10分～
●対象者：幼児～小学生
●実施可能日：いつでも

こんな場面にオススメ

・子どもたちの防災教育
・楽しく学びたい

お問い合わせ先 特定非営利法人 宇和島 NPO センター

＜住所＞
〒799-3703
愛媛県宇和島市吉田東の町17-1

＜電話番号＞・FAX
0895-49-3563

＜Web＞
info@uwajima-npo-center.jp

B. 講座

③スマホ教室

初心者から中級まで対応したスマートフォン講座を実施します。写真撮影や動画撮影、アプリダウンロードなど、お困りごとに対応いたします。

●申込人数：4人～
●実施時間：1時間～
●対象者：中学生以上
●実施可能日：いつでも

こんな場面にオススメ

・スマートフォンが苦手な方
・高齢者が家族や知人に送ることができるように

④絵がき上手講座

絵が上手になるための講座。絵の描き方、色遣い、構図など、初心者から中級まで対応いたします。

●申込人数：4人～
●実施時間：1時間～
●対象者：小学生以上
●実施可能日：いつでも

こんな場面にオススメ

・絵が上手になりたい方
・絵の描き方を学びたい方

C. 交流

⑤ドライブツアー-植物観察

ドライブツアーやドライブツアー、ドライブツアーなど、お困りごとに対応いたします。

●申込人数：3人～
●実施時間：2時間～
●対象者：小学生以上
●実施可能日：いつでも

⑥ボードゲーム

ボードゲームは、成長段階で楽しめる。200種類以上のボードゲームをご用意。お困りごとに対応いたします。

●申込人数：2人～
●実施時間：1時間～
●対象者：小学生以上
●実施可能日：いつでも

⑦モルック

モルックは、成長段階で楽しめる。200種類以上のモルックをご用意。お困りごとに対応いたします。

●申込人数：2人～
●実施時間：1時間～
●対象者：小学生以上
●実施可能日：いつでも

⑧ブレアーク

ブレアークは、成長段階で楽しめる。200種類以上のブレアークをご用意。お困りごとに対応いたします。

●申込人数：2人～
●実施時間：1時間～
●対象者：小学生以上
●実施可能日：いつでも

支援パッケージは、楽しく遊べるプレーパーク(昔遊びやゲーム)やみんなが気楽に話すことができる茶話会を実施した。参加した子どもたちは災害後のストレスを分散させるように思いきり遊んでいた。大人たちは子どもたちが遊んでいる間に災害時の思いを話すことで気分を和らげることができた。

地域食堂のいぬび食堂と連携したことで、高齢者が参加する地域サロンでの開催依頼があり、キッチンカーを利用した地域食堂を実施。

高齢者は生活不安を訴える人が多く、特に災害時や普段の行政情報を取得する手段のスマホの使い方に困っている人が多かったため、支援パッケージのスマホ講座を実施した。ラインを使えるようになることで、写真を家族や知人に送ることができるようになり、高齢者自ら情報を発信することでつながりを作れるようになった。

また地域食堂を開催している吉田公民館は宇和島 NPO センターの事務所とも近いこともあり、センター事務所で開催するサロンとも連携することで、地域食堂が実施できない時期(新型コロナウイルス感染症)には、地域食堂がテイクアウトを実施する際の配布拠点として機能し、地域食堂がない期間中の相談窓口として機能した。

地域食堂(いぬび食堂)と支援パッケージと地域サロンとが連携することで、広範囲で被災した吉田地域の被災者の声を約 30 件聞くことができ、吉田町の人口は約 13,000 人うち単身高齢者は約 1800 人で聞き取った内容は一人暮らしで災害が怖い、支所ま

でいく事が困難である、災害時に逃げるところがない、また、災害復旧工事でトラックの通行が多く道路が凸凹になっているところがあること、話す相手がいなくてさみしい、雨の音が怖い、雨が降るときは避難するようにしているなど災害に関することが多い。避難は早め早めに行動することが大切で、また災害が起きてからでは遅いので続けて呼びかけていく事が大切、また避難所での生活に慣れ、不安を分かち合い楽しみながら避難することを話した。特に応急仮設住宅にて生活していた被災者が参加した際には、行政や地域支え合いセンター(宇和島市社会福祉協議会)と連携し、生活用品や家財支援、次の住まいを探したいなど生活再建に係る相談を聞くことができた。

吉田町いぬび食堂は自走に向けて動いており、また吉田地域サロン約 20 か所と自主運営しているところが多い。ただしサロンで実施した支援パッケージはパッケージプランの周知が行き届いておらず、単発のものが多く、継続して利用できるように案内する必要がある。

地域住民のほとんどが被災する大きな災害であったため、ボランティアへの感謝する声が毎月当センターで行っている茶話会や、吉田町単身高齢者、被災者の方をお誘いしたお出掛けバスツアー、いぬび食堂に参加のかたから多く、中には自身が支援者や地域に恩返ししたいと声もあり、約 100 人以上の方がボランティアに参加、吉田高校からも今後も広くボランティア活動をしていきたいということで活動を紹介していく。参加された方からは、またボランティア活動をしたいと単身高齢者の方々も幾度も活動され、当センターでも花を植え管理や、ボランティア活動できることが嬉しいとの声が多い、また、一人で何もすることがないから役に立ちたい、人と話して心が和むとの声も。現在、ボランティアバンクに登録され、地域食堂や支援パッケージの手伝いをする動きがでている。

◆旧三間地区:キッチンカーを利用したピンポイント型の事業を実施。

地域の課題:子育て世代向けの交流の場が少ない。

平成 30 年 7 月豪雨災害では 1 ヶ月の断水と飲料水については 2 ヶ月にわたり配水できない状況にあった地域。地域内の共助の力が強く、被災直後から住民の手で災害を乗り越えてきた。各地区つながりも強い状態。高齢者を中心とした地域のつながりが強いが、移住者や子育て世代向けの地域のつながりについては、対応の余地があった。

子育て世代より、交流の場が少ないとの声が約 30 件あり、事業計画する中、新型コロナウイルス感染症のため、計画を変更し、キッチンカーと支援パッケージにて約 240 人参加で防災カードゲームなまずの学校や、防災かるた、ボードゲーム、昔遊びなどを旧成妙保育園、コスモスホール三間、隣保館(公民館)等にて事業を実施。

◆ボランティアバンク

登録者数:104 人(2023031 現在)

ボランティアをしたい人とボランティアにお願いしたい人をつなぐ仕組みを構築。

ボランティアバンクへの登録はオンラインフォームを利用して、QR コード等でスマホ等からも登録できるように作成。

ボランティアニーズもオンラインフォームを利用しており、吸い上げた情報を登録者へ LINE を通じて発信することで、マッチングするもの。

ボランティア募集は週 1 回~2 回程度定期的に発信し、内容は様々であるも、大きくは「地域食堂ボランティア」「災害ボランティア」「清掃ボランティア」「地域ボランティア」に分けられる。

地域食堂ボランティアは今回の事業を実施するにあたり、拠点となる地域食堂の運営をいかに継続するかが課題となっていた。多くの地域食堂は少人数で運営しており、人手が足りない状況であることから、ボランティアバンクを利用し、約30人の高校生や他のボランティア団体等の地域住民以外で人手を確保した。それぞれでボランティアの募集人数は異なるが、1回につき約5人の確保ができた。

災害ボランティアは、平成30年7月豪雨から4年以上経過する中、園地の復旧はまだ続いているため、必要なボランティアを確保するためにボランティアバンクを利用した。市内の個人ボランティアが3回のうち吉田中学校から16名と(どのうつくり吉田中学校生徒数)参加された。土のう選手権を吉田中学校で開催したときに地元の株式会社浅田組様、株式会社シンツ様から土や土のう袋、ドリンクなど寄付していただき、フリップモリスジャパンさんも一緒に活動していただいた。

清掃ボランティアは主に海や川の環境に関するボランティアの募集に活用されている。災害後の海や川の災害ゴミの回収から始まったボランティアが現在は環境問題を解決するための活動に変化し、5団体の14回で260名の参加、地域住民も含めた多くのボランティアが参加している。

河川清掃はもともと吉田町で、個人で活動、花壇整理をされていた方がいたので、その方たちと地域の活動を更に広く周知し、地域住民で活動していくようになった。また、呼びかけによって地元高校生や、議員さん、他地域からの参加があるようになった。清掃活動をメインに行っている団体が協力してくださり、スムーズに広範囲の清掃活動を行うことができるようになった。

地域ボランティア(災害ボランティア以外)は、当初は主に支援パッケージを実施するためのボランティアであった。地域食堂と支援パッケージを地域住民とボランティアとで実施している中、被災者の方から「恩返しをしたい」との話が出てきた。被災者の方がボランティアバンクへ登録することで、受援者から約100人以上による支援者へ変わる人がでてきている。支援者になる事で地域ボランティアの活動に発展し始めており、地域のイベント(お祭り、夜市等)等にも広がっている。

ボランティアバンクの構築することで、定期的にボランティアができる仕組みができ、個人ボランティアが約30名再利用することも増えている。

登録者は、学生27名、高齢者女性3名、他74名で(登録者以外に参加される方約6人)、災害をきっかけとしてボランティアを始めた人が多い。

災害ボランティアだけでなく、身近な生活に関係する地域ボランティアを募集、実施することでボランティアバンクの変化が見られた。

特に海川の清掃ボランティア、地域イベントのボランティアは、郷土愛の強い地元ボランティアが参加しており、ボランティア活動を実施することで地域の声が届きやすく、参加されている方との会話で今必要としているものや家庭状況を知ることができ、今回の事業の交流の場の茶話会やお出掛けバスツアー、子どもの食堂に約20名の参加者も増え始めてきた。ボランティアバンクを通じて、交流が始まり、地域間の交流として実施した事業が「おでかけバスツアー」であり、同じ考えの人たちがつながる機会にもなった。

災害後の被災地域における人口減少や高齢化や単身化していく中で、地域で活動していくみまもり体制が、災害が起こるまであまり関わりのなかった近所の住民、単身高齢者同士で声掛けや体調不良の早期発見などできるようになってきた。またお出掛けバスツアーや茶話会で知り合った方同士で電話番号交換し車で移動できる方が最近単身になられた方を訪問したり、ボランティアや茶話会参加の声掛けにいかれている。吉田高校、三間高校のボランティア活動に参加していく体制もできてきた。

ボランティア活動のリピーターが多く見られる。

アウトプットの実績

【アウトプットに関する記載項目】

- 1 アウトプット「宇和島市旧市内・吉田町・三間町」の三拠点が被災者にとって相談しやすい場となっている
講座形式のパッケージが集まりやすく、災害があった地域だったため、防災講座のゲームが多かった。人が集まれるサロンや茶話会等でのパッケージものづくりやゲームができたことにより、被災者と地域住民の交流ができ、また新しいコミュニティ形成ができてきている。(4-2◆吉田地区でパッケージプラン資料参照)
他の団体も関わるができる体制を構築し、支援側の動きが活性化している。
ボランティアをキッカケに地域外の人に関わる仕組みを(ボランティア BANK)を作り、地域内外の人の還流を活性化させる関係人口の創出を目指す体制ができている。
- 2 指標 ・相談件数・拠点を活用する住民数
・イベントの実施件数・参加リピーター件数・パッケージプラン数
・他団体との連携回数・新しく連携した団体数
・ボランティア BANK の仕組みができているか・ボランティアの登録数・ボランティアに來た人の数
- 3 初期値・吉田・三間では相談窓としては設けているが、旧市内ではまだ窓口がない。
・パッケージプランはまだできていない
・既に関係性がある団体が1団体のみ
・これまでのつながりがボランティアはいるが、仕組化はできていない
- 4 目標値・日常の交流の中から住民の声を拾い、解決に結びつけることができる状態
・パッケージプランができ、実施している状態・3拠点で月1回以上のイベントが継続的に実施されている
旧宇和島市:月に一度の達成はコロナ禍でイベント自体中止をしなければならなかったこともありできなかったが、子ども食堂連絡協議会と連携し、各地域の子ども食堂で人気の防災ゲームなまの学校やかるとを計6回約200名の方が参加。
吉田:計10回のパッケージを約260人が参加した。やはり災害があった地域なので防災かゲームが人気だった。茶話会では植物雑貨を作成したりスマホ講座も2回たまたまかた講座を1回行い、また次回会いましょうねとお出掛けバスツアーで新しく知り合った方々が声かけあっていた。
三間:なかなか三間での活動が難しかったため3回のパッケージ実施で約100名の参加となった。初めてなまの学校を行ったとき、子ども達が何度も挑戦したことが印象に残っている、そのため、2回目のキッチンカーで訪れた時も同じ子ども達が参加して私たちも顔を覚えていたのでコミュニケーションがとれ、最後の成妙保育園活用のイベント時にもその子どもたちがきて、本当に楽しみにしてくれたと実感した。
・他団体との連携イベントが実施できている・新しく連携を始めた団体が1以上ある
一連携イベントは44回計168連携回数、新規は約70団体
・ボランティア BANK の登録者数が100人以上いる・ボランティア BANK の仕組みができ、関係者が利活用できる
登録者数:104名(2023.3.31)A:軽作業型、B:災害復旧型、C 運営型に分かれており、重複で登録されている方が半数の54名。ボランティアバンク活用は33回。計357人の参加があった。ホームページからボランティア募集依頼も可能また、ボランティアバンクの登録で個人と企業用に分かれている。ボランティアバンク専用ホームページも完成し、今後のボランティアバンクの活用した活動が広く周知できるようになった。ボランティアのリピーターは約30人で清掃活動、運営に限らず、できることに皆さん参加されている。

5 目標達成時期(事業計画書に記載した時期)

・2023年2月

実績値

- ・来所者数 R3 年度 2,324 名訪問件数 2,188 件、見守り訪問 650 件、相談件数 個人 140 件団体 116 件
- ・来所者数 R4 年度(2 月末現在)1561 名訪問件数 1705 件、見守り訪問 377 件、相談件数個人 88 件団体 18 件
- ・宇和島市吉田町にある当センター事務所が拠点となっており、公式ラインや SNS、イベント開催、参加により広く当センターを周知し、相談件数も災害支援から、地域の相談が増加してきた。
- ・地域食堂と支援パッケージを一緒に実施することで、参加人数が増加し、また幅広い年齢層の人が集まるようになった。旧宇和島市の住吉校区大浦地区で毎月 1 回行われているもてころ食堂でお困り事カフェコーナーを設置し、地域住民同士の交流の場また、信頼関係を構築していった。大浦地区での聞き取りは 68 件の聞き取り案があった。
- ・他団体との連携で地域食堂へ出向き各地域でのお困り事調査を行った。U.granddoma Japan との連携でキッチンカーイベントに参加し、三間への進出もできるようになった。他 NPO 団体約 23 団体と NPO まつりも開催し宇和島商店街で活動を知っていただく、また団体同士がつながるキッカケを作ることができ、既に他団体同士がつながりイベントを開催する予定と当センターに情報共有されている。
- ・NPO まつりを開催するにあたって事前に参加団体情報をリサーチしたり、実施後アンケートで得た情報など当日聞き取りを行ったもので地域内のコミュニティ、支援者の支援という形ができた。
もてころ食堂が行われている住吉校区で野菜を作られている団体があり、その団体をもてころクラブへ繋ぎ、これまで 4 カ月販売してきた MIMAMEN FARMER'S さんが野菜がない時期にその団体が入ることが決定し、5 月から 3 団体が順番に野菜の販売をもてころ食堂で行っていく事になった。
・また、NPO まつりで新しくパッケージプランに入れることができそうな団体との連携で当センターが開催しているサロンの茶話会で脳トレの活動をしている団体にきていただき、吉田町の高齢者が笑いにあふれた時間を過ごすことができ、コミュニケーションの取りやすいパッケージになると感じた。
・宇和島市商店街にある地域食堂のスペースゆう(NPO 法人スペースゆうともの会)でみんなのカフェ、みんなの食堂がテーマの新しい居場所になることも視野に入れ開催。2 階がフリースペースで 1 階がカフェとなっており、高校生ボランティアがお手伝いに入り当日は運営を行った。地域食堂を行えば 80 食が 20 分かからずに完売する。高齢者の多い商店街であるため、今後新しく居場所になりそこでパッケージプランが実施できるように繋いでいく。

4-3 外部との連携の実績

ここでは、以下のような点を記載してください。

- 行政、企業、NPO、アカデミアなどステークホルダーとの連携や対話について、どの程度実施し、どのような工夫をしたのか。

—行政とは、みまもりで繋ぎ事案等連携し、解決へと進めていった。

—企業とはボランティアバンク企業登録していただいたり、吉田中学校との土のう選手権で土のう用の土 3 トン、土のう袋、飲料等を支援いただいた。

ボランティアバンク企業登録していただいている方のボランティア活動参加などチラシ作製アプリの紹介など企業様イベントの周知をしたり、互いに協力しあえる関係ができた。

—NPO団体はNPO交流会をハイブリット開催し、活動紹介や相談を伺った。また、NPOまつりでは、宇和島市に登録している 68 団体のうち 20 団体が出展し、活動紹介、販売、発表を行い多団体との連携ができる環境づくりを行った。各団体が他団体ブースを訪れるきっかけを作った。他団体同士でイベントを開催する

動きが確認できた。また、今回初めての取組のNPOまつりで多数団体より評価いただき、次回も参加希望団体も多数ある。イベント後のアンケートをもとに次回の課題についての解決のヒントもいただいた。宇和島市NPO団体や企業との協働街づくりができるよう中間支援組織として担っていききたい。

▶ 市民参加について、合意形成のプロセスはどのように実施したのか。

—2021年10月より宇和島市弓良校区の子ども食堂に当センターがお困り事カフェコーナーブースを設置し、毎月参加して地域住民との交流と食を通して、コミュニティ形成を行っていった。地域の方もはじめのころは、食堂に関心のない方、自分の役割ではないという方がいた様子。回を重ね交流していく中で住民の意識が変化していき、自分から役割を持つようになっていった。また、自分の趣味や様々な相談事を話してもらえるようになり、民生委員がお困り事カフェコーナーに入っていたくようになった。来年度も地域支援として関わっていきながら地域課題解決に住民、行政と協働作りをしていく。

特に学生への呼びかけは、センターに遊びに来る高校生から広げてもらった。その高校生がレポートで参加してくれるようになった、その経緯として、被災地域の高校、中学校へチラシや直接学校へ声掛けを行いました、高校生ボランティアバンクへ登録者や、部活動を介しての参加もある。宇和島市吉田町で被災した方々が当センターの活動を知り、ボランティアで恩返しをしたいと活動を繰り返しされている。活動時のスタッフが着用するビブスにはホームページへのQRコード、ジャンパーには、公式ラインQRコードを貼り付け、その場で登録を促すこともできた。（「QRコード」は株式会社デンソーウェブの登録証です）

▶ 包括的な連携、コレクティブインパクトによる事業組成を実施した場合、その仕組み作りに際してどのような工夫をしたのか。

—宇和島市危機管理課と連携し進めてきた事業を通して、NPO、社会福祉協議会、教育機関、行政との連携を図ってきた。

上記の中で、海岸、河川清掃では、4つの地域団体、2つの教育関係（高校、中学）、約260名の地域ボランティア、3つの地域内企業、議員、県職員、市役所職員が参画し、地域の自然環境をまもる清掃活動が生まれた。2050年には魚よりゴミの数が上回るとされていること、流域治水を広く知ってもらうこと、この清掃活動で減災につながるということで参加。その結果、地域改題解決において、地域住民、地域団体、行政にて市民協働の事業を組成、その事業を受託し、地域内の課題解決の動きを生み出していく官民連携のプラットフォームづくりを進めていくことになる。

5 アウトカムの分析

この項目では、短期アウトカムの達成度とその要因や課題、そこから見えてきた様々な波及効果について記載してください。事業の効率性は、包括的な支援プログラムとして資源の有効活用や費用対効果について検証をします。いずれも【特定した事実＋価値判断】の構成で記載してください。また、短期アウトカムの達成度合いから、中長期アウトカムに向けた展望が見えてきていれば、それについても記載してください。

5-1. アウトカムの達成度

(1) 短期アウトカムの計画と実績

【短期アウトカムに関する記載項目】

- 1 短期アウトカム 「宇和島市旧市内・吉田町・三間町」の3拠点において、被災者（みなし仮説の住民など）と地域住民、地域外の人たちの交流が促進されコミュニティが形成された地域となる
- 2 指標 ・拠点に来る男女比・拠点に来る年齢層 男3割女7割 年齢層60代以上4割 20代から50代4割 20歳以下2割程度
- 3 初期値／初期状態 場はあっても新規参加者が入りづらかったり、そもそも交流の場がない
- 4 目標値／目標状態 3拠点共に世代を超えて誰でも参加できる交流の場になっている状態
- 5 目標達成時期 2023年2月
- 6 アウトカム発現状況（実績）
- 7 事前評価時の短期アウトカム（変更した場合は元の短期アウトカムを記載してください）

(2) アウトカム達成度についての評価

※複数のアウトカムの達成度を踏まえ、取りまとめ総合的に評価した内容を記載してください。

事業を実施したことにより、各拠点で概ね地域内外との交流が促進され、被災者を含めたコミュニティが形成されつつある。子ども食堂とパッケージプランとで事業を実施したことの効果

は非常に高く、子ども食堂と防災啓発のパッケージプランを一緒に実施することで、参加する被災者が入りやすい環境となり、地域との交流することができた。

防災以外のパッケージプランすることで、子どもだけでなく、高齢者の方々、男性の方々の新規に参加しやすい環境をつくることができ、拠点に来る年齢層は子どもから高齢者まで幅広い方々が参加された。ただし、もともと高齢化率の高い地域はどうしても子どもの人数や男性の参加は少なくなる傾向があったものの、世代問わずに、誰でも参加できる環境、地域は整った。地域として、吉田町、旧宇和島の住吉校区、三間ではイベントをした際に出展していた方が県からの委託で三間地区の 3 駅でイベントを開催されていく予定、その際やその方が開催するイベントには約 600 人の集客があるそうでそのイベントで三間ではパッケージプランをすることができる。パッケージプランは(4-2◆吉田町に添付)防災ゲーム、パラコード作りの防災関係と、スマホ講座、ドライフラワー植物雑貨教室、収納力 UP! たたみかた教室の講座、ボードゲーム、コミュニケーションゲームの交流、モルック、障がい者スポーツ、プレーパークの運動に分けられる。16 回実施し、参加世代は高齢者と子どもに大きく分かれ約 1,000 人の方が参加された。今後は、新たに子ども食堂と連携してパッケージプランを活用できるよう、助成金の申請を考えている。また、吉田地区の単身高齢者の方が編み物の教室をしたいと申し出があり、月 1 回の茶話会とは別に当センターのスペース貸して定期的に行うように計画中。現時点で受講者は約 5 名まだ周知が行き届いていないが楽しみにされている。

5-2. 波及効果(想定外、波及的・副次的効果)

一波及効果:本事業を進める中で、宇和島市として、地域における高齢者を中心とした「孤独孤立」への見守り事業、地域内での災害時を見越した防災事業強化を行う事業、市民主体の活動組成を後押しする市民協働事業といった、一般施策・平時事業へと、復興事業からシフトしても、これら事業を一部担いながら、地域課題の解決を担っていく方向で進んでいる。

一副次的効果:地域の高齢者を中心に住民巻き込んだコミュニティ活動を行ってきたが、本事業で作ったボランティアバンクを活用し、30 人ほどの地域住民が、子ども食堂の運営に携わっていき機会が生まれた。

また、吉田町では、吉田美化清掃活動について、地域の 3 つの団体、住民にて、美化活動の協議会を作り、今後運営していく事になった。

被災者支援から地域支援への変化。

子ども食堂に参加する住民の方々の多くは平成 30 年 7 月豪雨災害で大なり小なり被災しており、当初の想定では被災者支援の視点で事業を実施していたが、事業を実施する中で、地域の課題へ住民の視点が増え変化していき、孤独孤立といった見守りや地域の清掃といった視点的な相談が増えてきた。

被災地域のコミュニティづくりでは、災害をきっかけに住民自身に「どう命を守るか」が大きな意識としてあり、被災後、生活が安定してきた地域では、地域をどう守るかといった視点での相談となり、それに対応したパッケージプランを作成した。その結果、被災者支援のみならず、地域課題へ対応する地域支援も実施することができた。

ボランティアバンクの効果。

「支援される人から支援する人へ」ボランティアバンクをとおして被災者が地域のためにボランティア活動を実施するきっかけができた。

特に吉田町では吉田美化清掃活動が活発化してきた。吉田町をきれいにしていこうと地域住民とこれまで活動してきたグループと一緒に活動できるように拡大の支援を実施。美化活動で協議会をつくり、子ども食堂と一緒に活動を行えるように支援予定。

また地域の中高校生がボランティア活動と一緒にできる環境となり、郷土愛を育成できる事業として学校と連携し、ボランティアバンクを実施できた。

5-3. 事業の効率性

今まで子ども食堂単体で実施することが通常であったが、この事業では、子ども食堂とパッケージプランを実施することであり、子ども食堂を中心に被災者の地域での受け入れと、被災地域での災害後の地域コミュニティをつくっていくことを想定していた。

何もないところから拠点を作ることは非常にハードルも高く、時間もかかるところではあるが、もともと地域が開催している子ども食堂の拠点を利用することと、子ども食堂に新たな要素(パッケージプラン)を取り入れることで、短期間で効率よく事業が実施できた。

また、パッケージプランの実施では、ボランティアバンクを利用することで支援者側の負担を軽減することができた。

6 成功要因・課題

災害の被災経験があり、災害時にボランティア等の外部の人たちに助けられた経験のある地域や次の災害(南海トラフ地震)にて被災する可能性の高い地域では、外部支援の受け入れがスムーズであり、新たな被災者同士のつながりも展開しやすかった。

被災経験があっても地元のつながりが強く、災害を自分たちの手で切り抜けた地域は、外部支援の受け入れが難しく、新たな事業展開が難しかった。ただし、他地域から転入してきた被災者はもともと地元でのつながりもあったため、受け入れができていく状況。

7 その他深掘り検証項目(任意)

ボランティアバンクの高校生参加を深堀。

高校生が地域のボランティアに参加することで、郷土愛が生まれ、若い人がまちづくりに参加する機会が増えた。

高校生の参加したボランティア活動は NPO まつり、三間ショーケース、川清掃等。

見守り活動ではなく地域を盛り上げる活動がほとんどであり、当初のコミュニティづくりとは違う視点での成果が得られた。

104 人中 27 人中高校生

1 8. 結論

8-1 事業実施のプロセスおよび事業成果の達成度の自己評価

	多くの改善の余地がある	想定した水準までに少し改善点がある	想定した水準にあるが一部改善点がある	想定した水準にある	想定した水準以上にある
(1) 事業実施プロセス				子ども食堂との連携、パッケージプランの制作、ボランティアバンクの制作等、事業実施における必要なプロセスは全て完了し、継続して事業が実施できる状況となっている。	
(2) 事業成果の達成度	キッチンカー事業やイベントで支援パッケージを利用した。	三間地区での事業実施が少なかったことから、三間地区で	各地区で子ども食堂と連携した地域コミュニティができており、	宇和島市旧市内の住吉校区大浦地区は子ども食堂開催時	吉田地区では、地域住民による活動が活発化してきている、ま

		のヒアリングや課題抽出がスポット的にしかできなかった	被災者が新たなコミュニティに加入して生活をはじめ、パッケージプランやボランティアバンクについても想定水準に達成している。しかしながら、一部地域は、スポット的な子ども食堂の実施であったため、子ども食堂と連携した地域コミュニティづくりとしての継続性には改善が必要。	に民生委員が入ってくる体制ができた。	た、被災者から、支援側へボランティア活動の活発化達成
--	--	----------------------------	--	--------------------	----------------------------

(1)、(2)それぞれ1箇所を選択する。

8-2 事業実施の妥当性

◆集客効果

地域食堂と支援パッケージを一緒に実施することで、参加人数が増加し、また幅広い年齢層の人が集まるようになった。

地域

吉田:205人 主に防災ゲームは小中学生、高齢者が被災者
 旧宇和島市:221人 防災ゲームは未就園児から高校生と幅広い
 三間:90人 防災ゲームに小中学生が中心、家族連れが多く感じた

地域食堂単体で実施する場合は単一目的(主に食支援)で参加されるため、その目的を達成する人のみが集まる場となっていた。

事業では地域のテーマに合わせた支援パッケージを地域食堂に組み入れることで、複数目的が生まれ、参加しやすい環境となり、参加人数が増加することとなった。

また年齢層についても、高齢者ばかり、子育て世代ばかりといった場から、複数目的ができることで、多世代の交流の場となった。

◆共有効果

被災地域では多くの場合複数の問題を抱えていることから、地域内で様々な住民が集まること、また一緒に楽しむことで、住民同士で会話する機会が増え、被災後の不安や課題として「雨が降ると怖い」「雨の日は眠れない」「早期避難体質にすること」などをヒアリングすることができ、災害が起きた時に一緒に避難する人がいない、交通手段、一人できみしい、強がってきたがなかなか辛いことを話すまでに時間がかかった、その不安や課題を共有することができた。一もところ食堂に視覚障がい者のサロンを担当されている方が、ボランティア活動でお困り事カフェコーナーにきていただき、防災関連で悩みがあると話されていた、月に1度開かれている、視覚障がい者のサロンに出向き聞き取りをしたところ視覚障害者が災害時の避難や吉田地域での避難場所について不安を抱えていた。また、吉田の避難場所への経路についても倒壊の恐れがあるところを宇和島市危機管理課へ繋いだ。また、平成30年7月豪雨で吉田支所前に自衛隊のお風呂が設置されたが、視覚障がい者の方はご主人が普段入浴介助を行っていたため、男性と女性と

に分かれていたこともあり、なかなか入浴することができなかつたことなどを知ることができた。これについても宇和島市危機管理課へ繋いで2回にわたって説明対応していただき、個別避難計画が進められるようになった。

民生委員についても指摘があり、誰が担当しているのか、全く来ないこともあり、民生委員役員をしている方に話、吉田支所の課に繋ぎ、次の週に民生委員会議があり報告していただいた。また、地区の民生委員名簿を視覚障がい者サロンの方にお渡しした。

一吉田地区で3か所の道路陥没報告があり、市の道路は吉田支所産業建設課へ、県の道路は地方局管理課へ繋ぎ3か所に関しては整備が完了。だが、またすぐに陥没してくるという声があり、連絡を続ける必要がある。

一災害後、倒れた木が避難場所にそのままになっていて、避難できる状況ではないということ。当センタースタッフが公民館主事と確認に行ったところ撤去済であった。

◆自立効果

地域食堂の多くは地域内の住民で運営されているも、運営メンバーは限られている。また実施する際にも人手は必要となるも手が足りていないのが現状である。ボランティアバンクを知り、当センターの活動を知り、ボランティアで調理手伝いに人が集まることで、地域食堂を実施する人が多く人に認知され、運営メンバーの自信となり、継続する力とすることができた。

もてころ食堂はもともとなかったものが、今回の活動を通して、地域住民約10人を中心に継続開催するものとなった。メンバーは青年団、消防団、保護者や地域の方でまた、そこから地域外の友人に広まり現在は中学生ボランティア含め約20人が常にそろっている様子。

てくてく子ども食はまだ立ち上げたばかりだが、これまでの子ども食堂と比較して、子ども達が興味を持つようなことを一緒に行っている。またまぐろの解体ショーの時は、約300食は販売配布に至った。子どものおもちゃのリユース品など自由に持ち帰りができるコーナーも人気であった。

いぬび食堂は不定期となっており、回数が少ないが行われると、行列ができ賑わう。ただ、コロナ禍で配布のみとなっていたため、交流が難しかった。

うわつ子ども食堂は1回の参加となったが、これもコロナ禍で持ち帰りが多く少数の方が会場で食事ができた。子どもたちが広いスペースで遊ぶこともあり、長い時間滞在していたご家族もいた。そこで子ども達は、かるた大会などで遊び、大人はお困り事カフェコーナーでリラックスしていただくためマッサージ器で雑談しながらすごしてもらった。こんな時間はなかなかとれないということで大変喜んでいただいた。そこで、がけ崩れの問題がある地域からの意見もあった。

グランマ食堂は城南中学校等と連携しながら、中学生ボランティアがきて活動している。宇和島市子ども食堂連絡協議会ほどの食堂とも連携できており、食材確保や、@助成金、地域のフードドライブで取り組みを継続していくように仕組みができています。

◆住民の変化

被災した話が多かった。

被災後の生活、転居後の生活圏の不安。

地域の課題を話すようになった。

コロナ禍で外に出る機会がなかった。孤独を感じる人が出るきっかけを与えてくれた。

津波から逃げる手段がない。逃げる場所は山。

少子化高齢化。

子どもの遊ぶ場がない。

地域課題を一緒に考えるようになった。

一緒に活動することでお互い見守ることができる。

災害の視点で事業を実施してきたが、被災者支援と地域つながりを作る事業は同じ支援も多く、被災者のみでなく、事業自体が地域支援する事業と展開することができ始めた。その声から行政や民間の支援に紐づけたケースもあり、声を拾う、ニーズへの対応という流れも一部見られた。

—もてころ食堂で民生委員に相談にのってほしいとあり、もてころクラブへ繋ぎ 2023 年 2 月から民生委員の方に来ていただけるようになった。他、野菜の販売についてのニーズがあり若手農業家へ繋ぎ、2022.12 から毎月来ていただいた。回を増すごとに認知され、毎回購入されるかたもできていった。今後は住吉校区の方が作られている野菜も販売していき、毎月入れ替わり、三間の若手農家さんも数カ月に 1 度もてころ食堂で販売し、関係性を続けていき、次に災害時にお互いが助け合える関係性を構築できた。

—吉田町で災害後に近所の方同士での声掛けみまもり体制ができ、近所の方が発見し倒れていた方を緊急搬送し、入院し療養を終え現在もほぼ毎日声掛けができる体制ができた。

—被災者同士の繋がりが茶話会やお出掛けバスツアー等を通してでき、電話番号の交換や、新たにコミュニティがある。ボランティア募集の際も声かけ合い、参加されたり、被災者から支援者へ変化してきた。

—吉田町多夢の会も活動を通して、吉田高校ボランティア、地域住民との関わりも増え住民同士で災害があったところの美化活動に取り組みながら、新しくできたコミュニティでみまもり活動になっていけばいいと話されている。また、新しく植えるフジバカマに集まる蝶を見にくる観光客が増えるように活気付けにあればいいと活動強化している。

2 9 提言

地域のニーズを聞き取りして、それにあつた支援を行うことができた。当初の想定では、被災者の生活再建に必要な地域コミュニティづくりが必要であり、事業を実施する中で、地域のニーズを聞き取りすることで、被災後の課題から地域課題へ変化していることが把握でき、支援方法を被災者という視点から地域防災や生活支援を追加することができた。

事業実施しながらも、変化に対応することが必要と感じた。

外部の受け入れ、地域内の声かけ、地域内での連携が必要。

地域団体同士でのつながりを求めていたが、これまでは場が少なく、この事業を機会に話し合いができ、連携して事業が実施でき始め、継続性が確認できた。また地域内だけでは、知識や情報が不足しがちになるが、外部団体等と一緒に事業を実施することで、新たな手法や情報が入り、支援者側の活動が活性化し、より参加しやすいコミュニティづくりができた。

継続開催している子ども食堂と連携したことは事業継続性がかなり高く、今後もパッケージプランと合わせて開催していくことが可能となっている。

現在、被災者支援から地域支援への展開が見えており、今後は地域支援の事業として継続できるようにしたい。

パッケージプランの実施において、プラン実施団体の資金等が必要であるも、支援に必要な備品は本事業で購入できており、それぞれの団体へ備品等を貸し出しすることで、消耗品程度の費用で事業は実施可能。プラン実施団体の費用に関しては、市の NPO 等の団体補助金が活用可能とされており、補助金申請等の補助を本団体が実施する予定。

また実施に必要な人材はボランティアバンクを活用し、支援団体の補助としてボランティアを活用することで人材確保と人材育成を見据え、継続して実施できる基盤はできた。

3 10. 知見・教訓

被災地域では多くの場合複数の問題を抱えていることから、地域内で様々な住民が集まること、また一緒に楽しむことで、住民同士で会話する機会が増え、被災後の不安や課題を出すことができ、その不安や課題を共有することができた。

地域食堂の多くは地域内の住民で運営されているも、運営メンバーは限られている。また実施する際にも人手は必要となるも手が足りていないのが現状である。人が集まることで、地域食堂を実施する人が多く人に認知され、運営メンバーの自信となり、継続する力とすることができた。

4 11.資料(別添)



- 事前評価報告後に見直した事業計画やロジックモデル
 - ・事業計画書
 - ・事業評価計画書
 - ・ロジックモデル
(下段、事業にわかる資料に添付)
 - ・パッケージプラン(4-2◆吉田地区で添付)
- ・ボランティアバンク関連資料

ボランティアバンク ボランティア募集

ボランティアバンクとは？
ボランティア登録者名簿です。
ボランティアしたい人も！
ボランティア募集したい人も！
この1枚で世界が変わる！

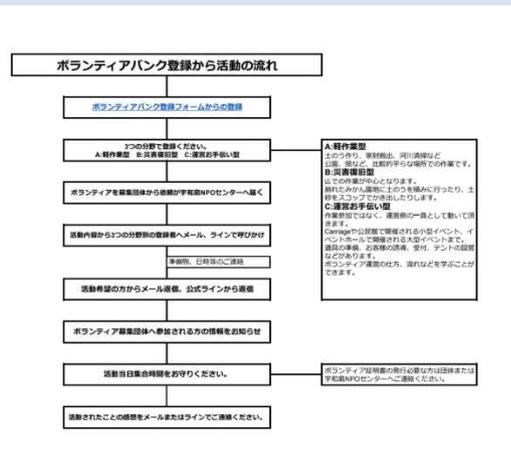
3つのボランティアのカタチ

A:軽作業型 土のう作り 河川清掃 子ども食堂の調理手伝い	B:災害復旧型 ミカン園地へ土のうを積みに行くなど	C:運営型 運営側の一員 道具準備 受付テント設置など
---	-------------------------------------	---

自分の得意なことを活かせるボランティアバンクに是非登録ください。
ボランティア募集団体や当センターから募集の際ご連絡いたします。

個人登録フォーム
団体、企業様登録フォーム
ボランティア活動記録をホームページで紹介

団体、企業様は個人登録も可能です。
お問い合わせ：特定非営利活動法人宇和島NPOセンター
住所：〒739-3703 愛媛県宇和島市吉田町東小銭甲71-1
☎：0895-49-3563 ⑧：nfo@uwajima-npo-center.jp



ボランティアバンク専用ホームページ URL
<https://volunteer-bank.jp/>

- ・住民向けアンケート資料

お困りごとアンケート

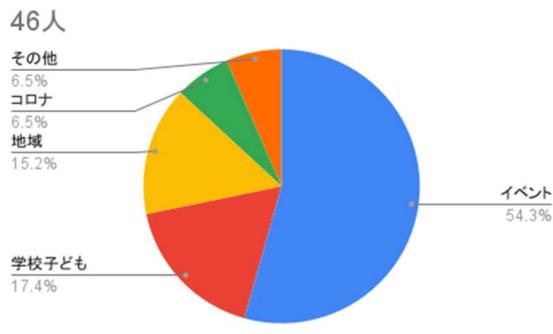
〇つけてね
10代・20代・30代・40代・50代
60代・70代・80代・90代

お困りごとを教えてください
地域のことややってほしいことなどがなくても

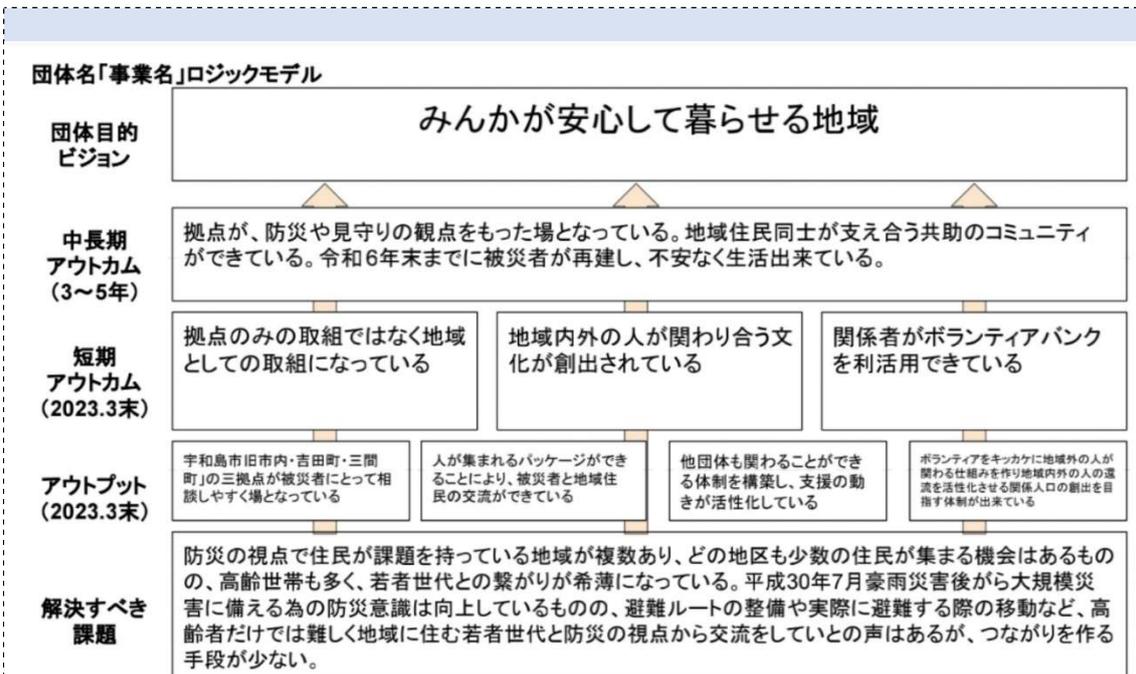
なれとかしたいと思いきす

よろしければお名前、ご連絡先など（メールも可）

特定非営利活動法人宇和島NPOセンター



- 事後評価報告時の事業計画やロジックモデル

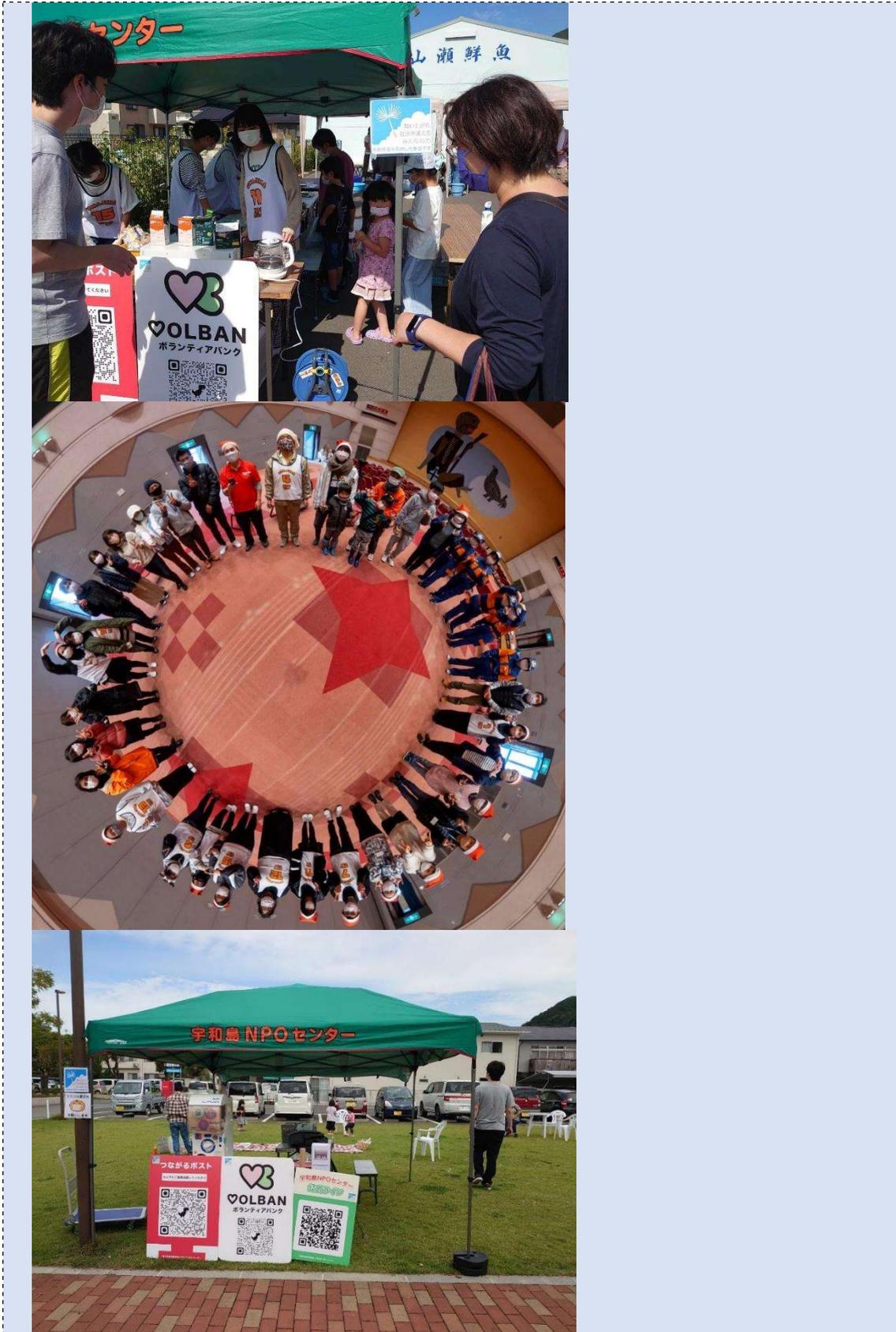


＞ 事業の様子がわかる写真資料

※公開可能な写真を貼付してください。(肖像権・著作権に十分にご注意ください)









- 広報活動の成果品、報道された記事
 - 毎週水曜日 FM がいやで 13:00～13:55CStoys で出演できる時。イベント案内やセンター活動報告等をYouTube 同時配信
 - 宇和島NPOセンターホームページ、インスタグラム、Facebook、公式ラインで活動報告、イベント予定、ボランティアバンク募集、ボランティア活動募集を周知
 - R3.7.7 愛媛新聞 西日本豪雨3年宇和島で線香花火ナイト全国一斉に鎮魂の明かり灯す
 - R3.7.8NHK 盛岡放送 西日本豪雨3年復興願う「希望の灯り」が被災地を繋ぐ
 - R3.7.10 地元テレビ UCAT BLUE SHIP 7.10 うわかいまるまる海掃除(宇和島市3地点同時開催)
 - R3.1.30NHK 松山 うわじま防災BOXハイブリット開催
 - 広報うわじま R4.7月号に活動紹介
 - R4.4.22 愛媛新聞学習プログラム「ブラ防さんぽ」(7月3日)
 - R4.8.23 愛媛新聞「災害ケースマネジメント」
 - R4.9.18 愛媛新聞「体験型防災プログラムうわじま防災BOX×子ども食堂」
 - R4.9.26 愛媛新聞「西日本豪雨被災 復旧状況 砂防ダム見学吉田町白井谷」
 - R4.10.24 神戸新聞 ぼうさいこくたい 2022 出展
 - R4.10 視覚障がい者ガイドヘルパーボランティア活動
 - R5.1.25 愛媛新聞 「ブラ防さんぽ」
 - R5.2.6 愛媛新聞 NPOまつり
- アンケート調査結果や実際に使用した調査票
- とりまとめられた白書
- 論文、学会発表資料
- 特許 など

■参考

調査概要を記載する際は、下記記載例をご参照ください。

【定量的な評価の場合】

◎短期アウトカム～～の評価

1) 調査方法

- ・アンケート調査(主な項目は～)
- 困っていること
- あったらいいもの
- 災害時どんな被害があったか
- 災害時誰と避難するか
- 避難場所は
- 得意なこと
- 思い出の曲
- 地区で足りないもの
- 何があったら便利か
- 何があったら嬉しいか
- もてころ食堂でしてほしいこと
- 不安なこと
- 気になっていること
- 災害時どうするか決めていること

2) 調査実施時期

- ・2022年XX～2022年XX
- 2021年10～2023年3

3) 調査対象者

- ・事業の対象となったXX人のうち、XX人を無作為抽出にて選定し～。回収者数X人(回収率X%)であった。
- 24回の聞き取りで244件のヒアリング数

4) 分析方法

- ・xxとxxについてクロス集計(カイ二乗検定、残差分析)を行った。

16人

Category	Percentage
イベント、食堂	50.0%
街頭	25.0%
公園	18.8%
障害者	6.3%

10人

Category	Percentage
地域食堂継続	27.3%
空き家について	9.1%
民生委員について	9.1%
公園	9.1%
コミュニティ	9.1%
街灯について	9.1%
こども学校での悩み	9.1%
仕事	9.1%
自主防災について	9.1%

